

被災地に希望をひろげよう

青年ボランティア ニュース

第7号 2011/5/5

民青同盟・青年ボラ
ンティアセンター

TEL0191-31-8036

復興へ、被災者の思いによりそって

被災地では、復興への歩みがはじまっています。見渡すかぎりガレキのなかに、よく見ると新しい電柱が。深い悲しみとともに、明日への一步をふみだしています。

はりつめた気持ちと和らいで

3月半ばから地元のボランティアが通う水産業を営むお宅では、昼休みにいつも、奥さんが被災当時の話をしてくれます。

先日、肉親を亡くしたことを、はじめて話しました。何度も通った青年は「奥さんの涙を初めて見た」といいます。

被災から数日後、長男のお嫁さんがガレキの下から見つかりました。小学生の子どもにどう打ち明ければいいのか悩んだといいます。火葬の燃料入手に苦労したこと、せめてお花を供えたいと奔走したこと…。「お嫁さんの実家に本当に申し訳ない」と苦悩している胸の内を明かしました。ボランティアと心を通わせ、張りつめた気持ちが少しずつ和らいできたようです。

4日、青年ボランティアは、津波でこんがらがった漁具をほどこき、結びなおしました。一面ガレキのなかから、見つけ出したものです。「津波がきていったんあきらめたけど、生きているから欲が出て…。これがあれば漁業で生きていける」。もう一度、生きてみようとの思いを後押ししたいと、ボランティアの手に力がこもりました。

青年ボランティアのゼッケンをきていると、地域の人たちが、よく会釈してくれます。作業の手をとめ、「ありがとうございます」と声をかけてくれることも。一つひとつの積み重ねで、地域の信頼がよせられています。

生きる力強さを応援したい

海辺で流されてきたモノを片付けているとき、個人の写真アルバムや卒業証書がありました。捨てるに捨てられず、青年ボランティアが近くの避難所の本部に届けました。写真を見て、本部のおじさんが「この人知っている」といいます。「家が津波で全壊し、まだ連絡がとれていない。お届け物は預かっておきます」。

届けに行った青年は、どう言葉を返せばいいか戸惑いました。ただ、被災者の方々との触れ合いをつうじ、深い悲しみをかかえつつ明るくふるまい、ここで生きていくとの力強さを感じたといいます。「先の見通しがもてるように、地元に戻ってからも僕らに何ができるか考えたい」と話しています。

地元の青年とも交流

陸前高田市のボランティアセンターに毎日手続きに行くと、受付をやっている青年たちと対話になります。「今日の活動参加は何人ですか？」と聞かれて130人と答えると、ビックリ。「連休でいっきに片付きますね」とうれしそうに話してくれました。

受付の青年たちもボランティア。実家が津波に流され、親戚の家に寝泊まりしながら頑張っています。全国からの青年ボランティアが、ふるさとの復興を願う青年たちを励ましています。